

居場所スタッフの魅力

多様なスタッフの存在

最後に、居場所づくりにかかわるスタッフについて書き留めておきたい。

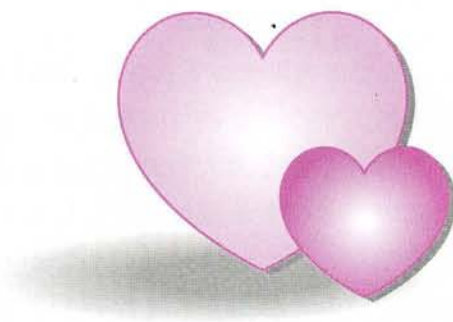
居場所にかかわるスタッフといっても、実に多様な担い手がいる。地域とのかかわりと言えば青少年相談員や青少年委員、民生委員、保護司から町内会の人々、ボーイスカウト、ガールスカウト、YMCAなどの青少年団体スタッフ。学校とのかかわりと言えば、教員やPTA、小中学校の卒業生の親、学生ボランティアなど。さらには社会教育施設や児童福祉施設職員、ユースワーカー、冒険遊び場プレイリーダー、フリースペースのスタッフ、個人の自宅を開放しての塾経営者などもかかわっている。それゆえに、その役割もかかわりのスタンスも多様となるが、基本的な働きはどのようなものなのか。

同行者としてのスタッフと 若手スタッフの力

居場所が生まれる瞬間には、自分らしさの獲得や発見があるだけでなく、同時に自分がなにをしたいと感じているかをつかむ瞬間でもある。

京都市南青少年活動センターのロビースタッフの動きをふりかえってみると、自分のなかから「こんなことをしてみたい」「やってみよう」と思え、それを実現していくプロセスにスタッフが寄り添っている。子ども・若者の願いに添って彼ら彼女らの小さな自己実現の同行者となってみること。子どもたちと一緒に遊び、身体を動かし、小さな感動を共有するなかで彼ら彼女らのなかにある願いを感じ取ってみることが、新しい活動を生み出すヒントになっている。

とくに子どもたちに年の近い若いスタッフは貴重な存在となっている。なぜなら子どもにとって、若手スタッフは溶け込みやすい存在でもあり、自分たちの近未来を生きるモデルにもなるからだ。若い力はそこにある。



若者の近未来と 生活者のモデルとしての大人スタッフ

その若手スタッフをどっしりと後ろから見守り支援するベテランのスタッフがいる、より一層、安心して子どもたちにかかわっていける場ができていく。若手スタッフは一人前の大人と共に動くということを通して、地に足をつけて生活することと社会生活のスキルも学ぶことになる。

実社会に生きる大人の姿を目のあたりにしながら、社会での生き方と近未来の生活展望を得る。一方大人の側も自らの社会的な役割や意味を若者とのかかわりを通して問いかげられ、時として壁となり、認めあいとせめぎあいのなかで、自らの存在意味をつかんでいく。若者は先行する世代を継承しつつ新たな感覚と発想をもって社会に活力を与え、若い力と感性で新しい社会を築いていく。渋谷ファンイン^{*4}の事例からは、そうした若者スタッフと大人スタッフとの互恵的な関係が見えてくる。

そこには若者を「社会問題の根源ではなく、問題解決の活力である」ととらえる大人側のまなざしの転換も求められる。

*4：渋谷ファンイン（P15参照）

居場所づくりのスキルとしての グループワーク

最後に、これまで紹介してきた事例に見られる居場所づくりの手法として、グループワークに注目したい。グループワークの基本は、メンバーの相互作用による個の成長に信頼を置くところにある。

スタッフは子どもたち・若者たちに同行しながら、彼ら彼女ら自身で小さくとも自律的な社会をつくっていく力に信頼を置き、異質な他者に出会える場をコーディネートする。プログラムをあまり決めずにおこなっていく中長期キャンプや通学合宿などもひとつの例だが、南青少年活動センターにおいても、子どもセンターばあんにおいても、世田谷区のさくらっ子体験教室の取組においてもこの視点が活かされている。スタッフは彼ら彼女らのかかわりが築かれていくプロセスに注目し、子ども・若者が葛藤も含めて今ここで生き生きと生きているかどうか、そこに感覚が向けられている。

それは逆説的であるが、今ここでの生の充実こそが、明日を展望する勇気と自信と他者への信頼を生むということを体感的に知っているからだろう。

萩原 建次郎（駒澤大学文学部講師）

豊島区社会教育委員、ガールスカウト子どもの居場所協議会委員。

専門・研究テーマは青少年支援者の力量形成、居場所論。主な著書・論文として「青少年支援者の力量形成と支援の在り方についての臨床研究－京都市南青少年活動センターの取り組みから学ぶ－」駒澤大学教育学研究論集第20号2004年、「子ども・若者の居場所空間とデザインの方法」日本社会教育学会編『子ども・若者と社会教育』東洋館出版2002年、共著『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房2001年、「若者にとっての『居場所』の意味」日本社会教育学会紀要No.33 1997年などがある。